

## ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（一）

曾 田 長 人

### はじめに

ギリシア・ローマ古典古代（特に古代ギリシア）がナチズムの世界観・政策の一つの根であったことは、ドイツの「過去の克服」の本格化と並行して次第に知られてきた。旧東ドイツでは1966年、ヨハネス・イルムシャー(Johannes Irmischer)の論文「ファシズム政権下ドイツにおける古典語授業」<sup>1)</sup>、旧西ドイツでは1977年、ヴォルカー・ローゼマン(Volker Losemann)の著書『ナチズムと古代 1933年から1945年にかけての古代史という学科の展開に関する研究』<sup>2)</sup>を先駆けとして、人文主義<sup>3)</sup>とナチズムの関わりについての研究が行われてきた。この二つの論文・著作は、ドイツの古典語教師・古典文献学者・古代史家によるナチズムへの協力の面に主に光を当て、これを批判的に剔抉するものであった。

1970年代以降、ヴェルナー・イエーガー(Werner Jaeger)を中心とする「第三の人文主義」とナチズムとの関わりも、批判的な考察の対象となった<sup>4)</sup>。「第三の人文主義」とは、1920年代から30年代にかけて生まれた、古典復興の精神運動である。1920年代から1970年代初期にかけてのヴァイマル共和国、ドイツ第三帝国（以下、第三帝国と略）、旧西ドイツにおいて人文主義者の間で大きな

---

1) Irmischer, Johannes: Altsprachlicher Unterricht im faschistischen Deutschland, in: Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte, Jg. 5/6, Berlin(Ost) 1965/55, S.225-271.

2) Losemann, Volker: Nationalsozialismus und Antike. Studien zur Entwicklung des Faches Alte Geschichte 1933-1945, Hamburg 1977.

3) 人文主義とは多義的な概念である。本論において人文主義とは、「ギリシア・ローマ古典古代との取り組みを通して人間や文化の形成を目指す精神運動」として理解する。人文主義者とは、「ギリシア・ローマ古典古代の精神的な遺産の伝承と携わる、古典語教師、古典文献学者、古代史家」として理解する。

4) Müller, Gisela: Die Kulturprogrammatik des dritten Humanismus als Teil imperialistischer Ideologie in Deutschland zwischen erstem Weltkrieg und Faschismus, Diss. Berlin(Ost) 1978. Werner Jaeger reconsidered. Proceedings of the Second Oldfather Conference, held on the campus of the University of Illinois at Urbana-Champaign, April 26-28, 1990, edited by William M. Calder III, Atlanta 1991.

影響を及ぼした。人文主義とナチズムの関わりについての近年における考察の集大成は、古代史家ベアト・ネーフ(Beat Näf)の主催下1998年にチューリヒ大学で開催された学際的コロキウム「ファシズムとナチズムの時代における古代学とナチズム」<sup>5)</sup>である。このコロキウムなどによって、人文主義とナチズムの関わりという問題の広がり、すなわち人文主義者のナチズムに対する様々な形での抵抗の諸相も明らかにされ始めた。

これらの先行研究の中で、第三帝国におけるギリシア・ローマ古典古代の受容を特徴付ける一つとして注目されたのは、スパルタ受容である。周知のように、古代ギリシアにはアテナイとスパルタという二つの代表的な都市国家<sup>ボリス</sup>が存在した。その際アテナイは主に学問や芸術、スパルタは主に軍事や教育という側面から関心を惹いた。18世紀後期から19世紀にかけてのドイツの新人文主義の流れを汲む古代ギリシアの受容においては、人間性が理想として追求された。これと関連して、おおむねアテナイがドイツの文化的な模範として重視され、スパルタはむしろ忌避された。それは例えば、シラーの講演「リュクルゴスとソロン立法」が示すとおりである<sup>6)</sup>。この講演においてシラーはスパルタとアテナイの立法者を比較し、後者を高く評価したのであった。スパルタとアテナイに関する同様の評価は、ヘーゲルにおいても見られる<sup>7)</sup>。しかし他方で、スパルタに対する積極的な評価も一部に存在した。これを底流としてスパルタは20世紀の前後からドイツ青年運動などを通して次第に注目され、第三帝国下、自らの追求すべき「原型」<sup>8)</sup>として社会の様々な場で顕現するに至った。

ナチズムはその本質において反知性主義的な運動であり、ヒトラー自らが述べているように、彼は過去の歴史を学問的に考察するのではなく、そこから自らの関心に役立つものを恣意的に利用してきた<sup>9)</sup>。ナチスのスパルタ観も、過去の歴史からの恣意的な引用の一例に過ぎなかったのだろうか。一方、第三帝国成立以前の人文主義者によるスパルタ観は、ナチズムによるスパルタ受容に何らかの影響を及ぼしたのだろうか。第三帝国下で支配的なスパルタ受容に対して、批判は存在しなかったのだろうか。

---

5) Antike und Altertumswissenschaft in der Zeit von Faschismus und Nationalsozialismus. Kolloquium Universität Zürich 14.-17. Oktober 1998, hrsg. v. Beat Näf, Mandelbachtal/ Cambridge 2001.

6) Schiller, Friedrich: Die Gesetzgebung des Lykurgus und Solon, in: Sämtliche Werke, Bd.4, München 1980, S.805-818.

7) ヘーゲルはアテナイを個人の自由が保たれていたがゆえに評価した一方、スパルタの「非人間的な苛酷さ」(Hegel, Georg Wilhelm Friedrich: Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Bd.12, Frankfurt am Main 1970, S.320)を指摘し、スパルタを「奴隷船」(a.a.O.)に譬えた。

8) Roche, Helen: Spartanische Pimpfe: The importance of Sparta in the educational ideology of the Adolf Hitler Schools, in: Sparta in modern thought. Politics, History and Culture, edit. by Stephen Hodgkinson and Ian Macgregor Morris, Oxford 1993, p.232.

9) Hitler, Adolf: Mein Kampf. Eine kritische Edition, hrsg.v.Christian Hartmann, Thomas Vordermayer, Othmar Plöckinger, Roman Töppel, München 2016, Bd. I, S.169.

本論は以上のような問題関心に基づいて、第三帝国におけるスパルタの受容の諸相を実証的に検討する。さらにその検討の結果を踏まえた上で、同帝国におけるスパルタ崇拝の高まりがどのような経緯を踏まえて生まれたのか、思想的に跡付けることを試みる。

考察の順序は、以下のとおりである。第一章は「スパルタについて」取り上げ、スパルタに関する基本事項の整理を行う。第二章は「ナチズムの世界観・政策とスパルタ」について考察し、ヒトラーを初めとするナチス幹部の世界観、第三帝国の政策とスパルタとの関連に関して検討する。第三章は「第二次世界大戦中のスパルタ受容」に目を転じ、同大戦中スパルタが戦意高揚のためどのように役立てられたか、整理する。第四章は「第三帝国のスパルタ崇拝に対する国外での賛否」について考察を行う。第五章は「第三帝国のスパルタ崇拝に対する国内での批判」を検討する。なお紙数の都合で、第一章から第二章にかけては「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容 (一)」、第三章から第五章にかけては「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容 (二)」に分けて発表することを、予め断っておく。

## 第一章 スパルタについて

古代のスパルタはギリシアのペロポネソス半島南部、ラコニア地方に存在した。ギリシアの英雄ヘラクレスの子孫が北方から帰還してスパルタに移住した、ということが伝えられてきた。スパルタは自立した都市国家<sup>ポリス</sup>としては、前8世紀から前2世紀にかけて存立した。前6世紀から前4世紀にかけてはペロポネソス同盟の中心としてギリシア最強の軍事力、質実剛健を誇った。スパルタ建国の祖で立法者のリュクルゴスが国制を規定したと言われ、それが長年、維持されるに至る。以下、1. 身分の三層構造、2. スパルタ市民の教育、3. 自給自足体制、4. 文学に詠われた軍事面での活躍、という四つの面から、スパルタのあり方をまとめてゆく<sup>10)</sup> (第二章の叙述を睨んで、できるだけ第三帝国の時代のスパルタ観に定位する)。

### 1. 身分の三層構造

スパルタの住民は、以下の三つの層に分かれていた。

第一の層は、スパルタ市民からなる。彼らは自由な成年男性であり、参政権を持ち兵役の義務があり、スパルタの内部に居住した。2で触れる軍事的教育を受けた戦士身分で、第二次メッセニア戦争の後、「同じ広さの土地」を所有し平等となったがゆえに、「同等の人たち」とも呼ばれた。プ

---

10) スパルタに関する古代の伝承としては、プルタルコス『英雄伝』の「リュクルゴス」「リュサンドロス」「アゲシラオス」「アギスとクレオメネス」の章、クセノポン『ラケダイモン人の国制』『ギリシア史』などを参照。その他、ヘロドトス『歴史』やトゥキディデス『戦史』にも、スパルタに関する記述が存在する。

ルタルコスによれば、当初9000人いたという。

第二の層は、ペリオイコイからなる。ペリオイコイとは「周辺に住む者」という意味で、実際スパルタの周辺に居住していた。彼らは自由だが参政権はなく、兵役と納税の義務を負っていた。その多くは農民で、一部は商業・手工業と携わり、軍事面の功績によって解放されることがあった。ペリオイコイの数は、推定で約4万人から約12万人の間を揺れ動いている。

第三の層は、ヘイロータイと呼ばれる非自由身分の、(スパルタ国家の) 公的な奴隷からなった。彼らの多くは、スパルタ市民に征服されたメッセニア人であった。ヘイロータイもペリオイコイと同様スパルタの周辺に居住し、農業に従事した。彼らは貢納の義務を負うものの、参政権を持たず兵役の義務もなかった。解放されることはなく、しばしば反乱を起こしたことが記録されている。およそ20万人いたとされている。

こうしてスパルタにおいては少数のスパルタ市民が、数からしておよそ30倍から40倍からなるペリオイコイとヘイロータイを支配した。三つの身分間の結婚、スパルタ市民と外国人との結婚は、禁止されていた。スパルタ市民はヘイロータイの反乱を未然に防ぐため、屈強なヘイロータイを若いスパルタ市民に時折、殺害させた。そういった殺害を正当化するため、スパルタ市民の最高監督官は毎年ヘイロータイに宣戦を布告したという。したがってスパルタは、恒常的な内戦状態にあった。

## 2. スパルタ市民の教育

1で述べたような、スパルタ市民を最上層に戴く社会構造は、どのようにして維持されたのであろうか。その際に重要な役割を演じたのが、スパルタ市民の教育、すなわち<sup>ア</sup>軍事的<sup>ゴ</sup>教育<sup>ー</sup>制度<sup>グ</sup>である。いわゆるスパルタ教育は、今日では厳しい教育の代名詞として使われる。スパルタ教育の歴史上の根拠となったのが、この<sup>ア</sup>軍事的<sup>ゴ</sup>教育<sup>ー</sup>制度<sup>グ</sup>である。

スパルタ市民の子供が生まれると、新生児は部族の中の最年長者に試された。そして<sup>ア</sup>軍事的<sup>ゴ</sup>教育<sup>ー</sup>制度<sup>グ</sup>に耐えられないと判断された虚弱な新生児は、スパルタ近郊タイゲトスの谷へ遺棄された。健康と認められた子供は満7歳まで両親の下で暮らし、その後、同年齢の人の群れの中で30歳に至るまで兵営生活を送った。この間、年長者の指導下、仲間と共同で食事を取り、テントを共にした。読み書きも習ったが、教育の重点は厳しい身体的な訓練に置かれ、特に(ボクシング、レスリングなど)格闘技の訓練が推奨された。戦争に備え、勇気と服従が重視され、生活を楽にする全てが禁止されたという。

## 3. 自給自足体制

1、2で触れたスパルタの身分構造、市民の教育は、他のギリシアの都市国家の<sup>ボ</sup>都市<sup>リ</sup>国家<sup>ス</sup>のそれと比べて大きく異なるに至った。こうした独自の国制を維持する上で教育と並んで重要であったのが、スパル

タの自給自足体制<sup>11)</sup>である。

スパルタにおいては、スパルタ市民がいわば地主として農地の管理に当たり、農業が重視された。他方、商業が蔑視された。外国との商取引は禁止され、リュクルゴス以来、スパルタにおいてのみ流通する鉄の貨幣を使用したということが言われた。相続に際して与えられた「同じ広さの土地」の分割は禁止され、こうした「土地の分割相続・金銀貨幣の使用・貿易による富の蓄財」の禁止などによって、市民の間で不平等や、その結果としての奢侈が生まれるのを防ぐことが図られた。外国への旅行も、公の委託があった場合を除いて禁止されていた。

自給自足体制は古代ギリシアの都市国家一般において自由、自治と並んでその理想を満たす条件の一つであった<sup>12)</sup>。そういった中でスパルタにおける自給自足体制の徹底は、際立っていた。

#### 4. 文学に詠われた軍事面での活躍

2において触れたスパルタ市民の軍事的教育制度は、有事にどのような成果を挙げたのだろうか。以下スパルタ市民の軍事面の活躍に関する有名な伝承を二点、取り上げたい。

第一に、前669年から前600年頃にかけて、スパルタ市民が自らの領土を広げたメッセニアにおいてヘイロータイの反乱、すなわち第二次メッセニア戦争が勃発する。この戦争は約70年、続いた末、スパルタ市民が辛勝を収めた。スパルタの詩人テュルタイオスは「エレゲイアー」という詩の中で、この戦争のことを次のように詠っている。

「死ぬることは美しい、善きひとの己が祖国の、そのために戦って、先陣に仆れるとき。己れのポリスと、肥沃な耕地を後に残し、愛する母、老いたる父を伴い、小さな子等と妻を連れ、さ迷いながら物乞いをするのは何にもまして辛いこと。(中略) さあ、若者達よ、戦え、肩をならべて踏み止まれ。恥ずべき逃亡が、恐れが、心にあってはならぬ。心中の気力を大きく猛くするのだ。勇ましく戦って生命を惜しむな。(中略) たしかに、お互肩をならべて踏み止まり、まともにぶつかる先陣の戦に敢えて進めば、幾何かは死ぬ。しかし後々まで民を救う。が、もし、惑い逃げれば、その徳は悉く無に帰するのだ。つい恥ずべき行為に及んだ後、どれだけの不幸が生ずるか、数え尽すことなど出来はせぬ。」<sup>13)</sup>

11) 第四章で後述するエーレンベルクは、スパルタの国制をこう名付けている(Ehrenberg, Victor: Ein totalitärer Staat (1946), in: Sparta, hrsg.v. Karl Christ, Darmstadt 1986, S.224)。

12) 太田秀通『スパルタとアテネ』(岩波新書、1970年) p.18。

13) 山村敬「Lyra Graeca 覚書1 カッリーノス、テュルタイオス」(『東北学院大学論集 一般教育』[第54号、1970年]) pp.21-25.引用部で、改行部も通例の文と同じく続けて表記した。

この引用部においてテュルタイオスは「祖国に殉ずる死」を讃え、敗戦国民の惨めさを説き、敵前逃亡を諫め、戦いを鼓舞している。

第二に、ペルシア戦争中の前480年に行われた、テルモピュライの戦いが挙げられる。ペルシア軍のギリシア来襲に際してギリシアの諸都市国家は、<sup>ポリス</sup>連合軍を結成した。その際スパルタ王レオニダス麾下のスパルタ兵300名は、10万（この数については諸説がある）のペルシア軍に対して、アッティカ以北を防衛するためテルモピュライの通過路に布陣した。スパルタ軍は3日間、奮戦するが、寡勢に多勢は如何ともしがたく遂に刀折れ矢尽き、テーバイその他のギリシア兵が撤退する余裕を作るため、全員が玉砕するに至る。テルモピュライの戦いでスパルタ兵の祖国愛、自己犠牲は、同時代のギリシアの詩人シモニデスによる、以下の「テルモピュライの戦死者碑銘」によって不朽のものとなった。この碑銘はドイツではシラーの詩「逍遙」（1795年）の中でドイツ語へ訳され<sup>14)</sup>、人口に膾炙した。彼の詩の該当部分の日本語訳は、以下のとおりである。

「旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ告ゲ知ラセヨ、我ラ国法ニ従ヒ、ココ（テルモピュライー以下、引用文内のかっこは原則として引用者による）ニ倒レ伏スヲ、汝ハ見タリ、ト。」<sup>15)</sup>

テルモピュライは、スパルタから約200キロ離れた遠方にある。当地で戦死したスパルタ兵には様々な想いがあっただろうが、そういった想いから、祖国に殉じ国の法を守ったという一点だけを故国の人に伝えることを願ったという。

上で引いたテュルタイオスの詩「エレゲイアー」およびシモニデスの「テルモピュライの戦死者碑銘」に詠われた、戦うスパルタ市民の姿は、後世のドイツ・ヨーロッパの人々に長い影響を及ぼすに至るのである<sup>16)</sup>。

ペロポネソス戦争などの戦で多くの戦死者を出したこと、それにもまして少子化によってスパルタ市民の数は次第に減り、かつての約9000人が前2世紀には約1000人にまで減少したという。またペロポネソス戦争での戦勝の結果、外国から富が流入し、土地の分割相続の禁止が解禁され、多くの土地は一部のスパルタ市民の所有に帰し、平等であったスパルタ市民の間で貧富の格差が生ま

---

14) Schiller, Friedrich: Der Spaziergang, in: Sämtliche Werke, a.a.O., Bd.1, S.231.

15) ハインリヒ・ベル『ハインリヒ・ベル短編集』（青木順三編訳、1988年、岩波文庫）p.21.

16) テュルタイオスについては、Meier, Mischa: Tyrtaios - Die Entstehung eines Bildes, in: Antike und Abendland, Bd.69, 2003, S.157-182、テルモピュライの戦いについては、Albertz, Anuschka: Exemplarisches Heldentum. Die Rezeptionsgeschichte der Schlacht an den Thermopylen von der Antike bis zur Gegenwart, München 2006を参照。

れるに至る。こうしてかつてのスパルタの厳しい国制、市民間の連帯感は崩れていった。前371年にスパルタは、レウクトラの戦いにおいてテーバイに対して大敗を喫する。前3世紀には二人のスパルタ王、アギス四世とクレオメネス三世が<sup>ア</sup><sup>ゴ</sup><sup>ー</sup><sup>グ</sup><sup>ー</sup>軍事的教育制度の再建など、リュクルゴスの国制への復古を目指す改革を試みる。しかしそれは挫折し、前2世紀にスパルタはローマに征服された。

本章で述べたスパルタの身分構造、教育、自給自足体制、文学に詠われた軍事面での活躍は古来、毀誉褒貶の評価を受けてきた。特にアテナイが代表した民主制に批判的な人々は、スパルタに惹かれる傾向があった。

## 第二章 ナチズムの世界観・政策とスパルタ

本章では、第一章でまとめたようなスパルタにおける身分構造、教育、自給自足体制が第三帝国においてどのように受容されたのか、両者の世界観・政策の間にいかなる重なりがあったのか、検討を行う。このテーマと取り組む前に、ドイツにおいて20世紀初期に至るまでスパルタがいかに捉えられてきたのか、触れておきたい。以下、受容の重要な局面のみに目を注ぐ。

ドイツにおいては、18世紀後期からスパルタに対する顕著な関心が確かめられる。例えばプロイセンの詩人ヨーハン・W.L. グライム(Johann W.L. Gleim)は軍歌の中で「ベルリンはスパルタであれ」<sup>17)</sup>と詠い、当時、軍事強国化しつつあったプロイセンをスパルタに準えた。1824年に古典文献学者のカール・オトフリート・ミュラー(Karl Otfried Müller)は、彼が計画した「ギリシアの部族と都市の歴史」の一部として『ドーリア人』(スパルタ人の異名)を刊行し、スパルタへの関心を喚起した。同書の中心的な主張は、次のとおりである。

『ドーリア人』の序文には次のようにある。「本書の課題は、ギリシアの国民生活という有機体において中心要素をなす部族の中から(ドーリア人という)一部族に注目し、この部族を外的な状態や生活環境、とりわけその精神的な本質と生において認識し、描くことを要求した。」<sup>18)</sup> こうした課題設定からミュラーは、(スパルタという)ドーリア人国家の概念一般を説明することを試み<sup>19)</sup>、その際ドーリア人のあり方を、(アテナイがその影響下にあったアジア的な)イオニアのあり方から区別した<sup>20)</sup>。すなわちミュラーは、同時代の(新人文主義の影響下にある)人間性に依拠する見方

17) Gleim, Johann Wilhelm Ludwig: Bei Eröffnung des Feldzuges (1756), in: Sämtliche Werke (1811). Erste Originalausgabe aus des Dichters Handschriften durch Wilhelm Körte. Bd.4, Darmstadt 1971, S.1.

18) Müller, Karl Otfried: Die Dorier (1844), Hildesheim 1989, Bd.1, S. v.

19) A.a.O., S.xif.

20) A.a.O., Bd.2, S.3f., S.392f. ミュラー以前における両者の類型的な区別については、以下を参照。Schlegel, Friedrich: Von den Schulen der Griechischen Poesie (1794), in: Kritische Schriften und Fragmente (1794-1797), hrsg. v. Ernst Behler u. Hans Eichner, Studienausgabe, Bd.1, Paderborn/München/Wien/Zürich 1988, S.1-8.

ではスパルタの本質を理解できない<sup>21)</sup>と主張し、スパルタの貴族主義的な性格とアテナイの民主主義的な性格との違いを強調した<sup>22)</sup>。彼によれば、スパルタは（アテナイとは逆に）個人を共同体へ組み込む点において傑出していたという<sup>23)</sup>。そしてミュラーによれば、ドーリア人の歴史は「ギリシア史の魂」<sup>24)</sup>とされた。ギリシアの本質を表すとされたスパルタの姿は、（ギリシアの代表的な神の一つである）アポロンへの崇拜<sup>25)</sup>、造形芸術の発達<sup>26)</sup>、戦争の愛好<sup>27)</sup>と関係付けられたのである。

1871年のドイツ第二帝国の創設に先立って、オーストリアを含めた大ドイツ主義、それともオーストリアの排除もやむなしとする小ドイツ主義に基づいてドイツを統一するかをめぐり、対立があった。この対立はペロポネソス戦争の際のアテナイとスパルタの対立に重ねられ、文化に秀でたオーストリアはアテナイ、軍事に秀でたプロイセンはスパルタに擬せられることがあった<sup>28)</sup>。実際19世紀にプロイセン陸軍の将校を養成する幼年学校では、スパルタを模範とした厳しい教育が行われていた<sup>29)</sup>。19世紀末期から20世紀初期にかけてのドイツにおいては、いわゆる青年運動が生まれ、ワンダーフォーゲルの若者は、旅に出て山野を跋涉する。（パリやウィーンが代表した）世紀末の頹廃した空気を嫌い、ブルジョワ的な安楽さを捨て、自然の中で友情を育んだ彼らの姿は、「ドーリアの若者精神の復活」<sup>30)</sup>と評された。これらプロイセンの軍国主義、ドイツの青年運動は、周知のようにナチズムが成立する有力な背景となった。

ここで本章のテーマへと戻り、ナチス幹部の世界観、第三帝国の政策とスパルタとの関連を検討してゆく。最初に、第三帝国下の多くのギリシア観に見られた特徴に、触れておきたい。ドーリア人が前1200年頃から前1100年頃にかけて、北方からギリシア本土へ移住したことは、当時すでに

---

21) Müller, K.O. : a.a.O., S.34f.

22) A.a.O., S.9 178f.

23) A.a.O., S.2.

24) A.a.O., S.63.

25) A.a.O., Bd.1, S. X.

26) A.a.O., S.255.

27) A.a.O., S.245.

28) Landfester, Manfred: Humanismus und Gesellschaft im 19. Jahrhundert. Untersuchungen zur politischen und gesellschaftlichen Bedeutung der humanistischen Bildung in Deutschland, Darmstadt 1988, S.133. 「スパルタとアテナイとの対立」が、かつての新人文主義における「ドイツとフランスとの対立」と重なっていることについては、Bauer, Barbara: Der Gegensatz zwischen Sparta und Athen in der deutschen Literatur des 18. und frühen 19. Jahrhunderts, in: Staatstheoretische Diskurse im Spiegel der Nationalliteraturen von 1500 bis 1800, Wiesbaden 1998, S.80を参照。

29) Roche, Helen: Sparta's German Children. The ideal of ancient Sparta in the Royal Prussian Cadet Corps, 1818-1920 and in National Socialist elite schools (the Napolas), 1933-1945, Swansea 2013, pp.33-155.

30) Schmid, Alfred: Vom Basler »Ring«, in: Die deutsche Jugendbewegung 1920 bis 1933. Die bündische Zeit. Quellenschriften hrsg.v. Werner Kindt, Düsseldorf-Köln 1974 (Dokumentation der Jugendbewegung 3), S.936.



知られていた。また18世紀末期以来の言語学の研究から、北方のアーリア人がインド・ヨーロッパ祖語となる言語を話しており、この言語がギリシアを含めた様々な文明圏へ伝播したという仮説が生まれていた<sup>31)</sup>。ナチズムの(先駆となる)イデオログの多くはこうした事実と仮説を結び付け、実証的な裏付けがないまま、北方からギリシア本土へ侵入したドーリア人はアーリア人に他ならないと考えた。そして新人文主義の時代以来、存在した「ドイツ人とギリシア人の親縁性」のテーゼは、第三帝国の時代には特に「ドイツ人とドーリア(スパルタ)人」の親縁性のテーゼとして、かつての言語や国民性に代わって、(剛健で優秀な)アーリア人種という共通点を介して基礎付けられた。したがってスパルタの規範性が北方的なものに求められた一方、その衰退は「脱北方化 Entnordung」として把握され、その原因や過程の究明に関心が注がれるに至るのである。

次に、ヒトラーのスパルタ観について検討したい。彼はギリシア・ローマ古典古代に対して高い評価を下し<sup>32)</sup>、(スパルタを含めた)ギリシア・ローマ古典古代から学ぶ必要性を認識していた<sup>33)</sup>。先ほど古代ギリシアに関して、(スパルタが代表する)ドーリア的なあり方と(アテナイが代表する)イオニア的なあり方を区別して捉えるミュラーの見解を紹介した。その際ヒトラーはアテナイの文化的な事績を評価することがあった<sup>34)</sup>ものの、古代ギリシアについて語る場合、ドーリア人のことを意味していたという<sup>35)</sup>。ではヒトラーは、ドーリア(スパルタ)人の何を高く評価していたのだろうか。

ヒトラーの世界観の中心として、社会ダーウィニズムに基づく優勝劣敗の原則、人種主義が挙げられる。その際スパルタは彼にとって、優れた少数者(アーリア人種)を優生学によって維持し、彼らが劣った多数者を支配する、歴史上の模範として考えられていた。ヒトラーは1929年8月4日に行った演説の中で、次のように述べている。

「歴史上、最も明らかな人種国家であるスパルタは、こうした(新生児から虚弱な子供を除くという)人種法則を計画的に遂行した。我々ドイツでは、反対のことが計画的に行われている。すなわち我々は、人間性への近代特有の惑溺によって、より健康なものを犠牲にして弱いものを守ろうとしている。これは、社会的と自称する隣人愛が(障害者の世話をする)施設を設立

31) Müller, Max: The science of language, founded on lectures delivered at the Royal Institution in 1861 and 1863, vol.1, London 1899, pp.301-302.

32) Hitler, A.: a.a.O., Bd. II, S.1075.

33) A.a.O..

34) Heinrich Himmlers Taschenkalender, hrsg.v.Markus Moors/Moritz Pfeiffer, Paderborn/ München/Wien/Zürich/ Schöningh 2013, S.242.

35) Speer, Albert: Erinnerungen, Berlin 1969, S.110.

するまでに至っている。」<sup>36)</sup>

この引用において、スパルタは「最も明らかな人種国家」と名付けられた。そしてスパルタにおける虚弱な新生児の絶滅が擁護される一方、同時代のドイツにおける障害者への配慮が批判されている。

ヒトラーが『我が闘争』の続編として1928年に執筆し、生前に刊行されなかったいわゆる『第二の本』の中には、次のようにある。

「6000人のスパルタ市民による35万人のヘイロータイに対する支配は、スパルタ市民が人種的に高い価値を持つ結果としてのみあり得た。しかしこうした高い価値は、人種の計画的な維持の産物であり、我々はスパルタ国家の中に初の民族的な国家を認めざるを得ない。病気で、弱い、奇形の子供の遺棄、つまり彼らの絶滅は、今日の時代の哀れな愚行よりも「人間の尊厳に値し *menschenwürdiger*」、実際に千倍も「人間的 *humaner*」であった。かかる愚行は、きわめて病的な輩である彼らを是が非でも守ろうとし、十万倍も健康な子供たちの生を産児制限や避妊具によって奪おうとしている。」<sup>37)</sup>

上の内容は、以下の二つの点から注目に値する。すなわち第一に、スパルタにおける身分の相違が、「最も明らかな人種国家」としての性格つまり（近代の観点から）人種的な価値の高低として捉え直されている点である（ローゼマンは、19世紀にミュラーの設けた「ギリシア人の中での」種族の区別と、20世紀に一般化した人種の区別との関連を指摘している<sup>38)</sup>）。第二に、人間性や人間の尊厳に関する、ヒトラー独自の見解が表れている点である。すなわち彼は、注36の引用に述べられているように、新人文主義が顕彰しキリスト教的な隣人愛などの要素が入った人間性の擁護を、

---

36) Hitler, Adolf: 4. August 1929 “Apell an die deutsche Kraft”. Rede auf NSDAP-Reichsparteitag in Nürnberg, in: Reden, Schriften, Anordnungen. Februar 1925 bis Januar 1933, Bd. III/1, hrsg. u. kommentiert v. Bärbel Dusik u. Klaus A. Lankheit unter Mitwirkung v. Christian Hartmann, München/New Providence/London/Paris 1994, S.348. s. Hitler, Adolf: 18. Oktober 1928 “Was wir wollen”. Rede auf NSDAP-Versammlung in Oldenburg, in: a.a.O., S.164.

37) Hitlers Zweites Buch. Ein Dokument aus dem Jahr 1928, eingeleitet und kommentiert von Gerhard L. Weinberg. Mit einem Geleitwort von Hans Rothfels, Stuttgart 1961, S.216f.. s. Picker, Henry: Hitlers Tischgespräche im Führungshauptquartier 1941-1942, Stuttgart 1963, S.177.

38) Losemann, Volker: *Die Dorier* im Deutschland der dreißiger und vierziger Jahre, in: Klio und die Nationalsozialisten. Gesammelte Schriften zur Wissenschafts- und Rezeptionsgeschichte, hrsg. v. Claudia Deglau, Patrick Reinard u. Kai Ruffing, Wiesbaden 2017, S.112.

「人間性への感溺Humanitätsduselei」<sup>39)</sup>として嘲った。これに対してヒトラーによれば、障害者には現世での辛い生活を除く方が“人間的”であるという<sup>40)</sup>。

スパルタはヒトラーの関心を、「人種国家」以外の面においても非明示的に惹いていたと思われる。つまり彼は『我が闘争』の中で、「忠誠、犠牲への用意、沈黙<sup>41)</sup>こそ、偉大な民族が必要とする徳である」<sup>42)</sup>と記した。これらの徳は、スパルタで評価された徳と重なっていたのである。

次に、第三帝国の政策においてスパルタがどのように受容されたか、また両者の間にどのような重なりが存在したのか、1. 人種政策、2. 農業政策、3. 教育政策、4. 占領政策という四つの観点から検討してゆく。

## 1. 人種政策

第三帝国においては1935年、上で述べたヒトラーの人種観を反映し、いわゆるニュルンベルク人種法が公布された。これはドイツ人の血と名誉を守ることを目的とし、「ユダヤ人とドイツまたはそれと種の似た血統の国籍の持ち主」との結婚および婚外の性交渉を禁止した。同法はアーリア人種たるドイツ人を頂点とする人種的なヒエラルヒーの維持や純化を目的とした。それはかつてのスパルタにおける身分間、スパルタ市民と外国人との結婚の禁止と似た側面を持っていた（ただしスパルタにおいて、スパルタ市民がペリオイコイやヘイロータイとの間に婚外子を儲けることは認められていた。こうした点で第三帝国のいわゆるニュルンベルク人種法は、スパルタの法以上に厳しい法であったと言える）。

周知のようにナチスは、多くの身体的、精神的な障害者を「生に値しない生」の名の下に抹殺した。これを目的とするT 4作戦が1940年に発動され、多くの人が犠牲になった。T 4作戦は優秀人種の保護や育成という彼らの本来の目的の裏面であったが、彼らが追求した優生学は、注36～37で触れたヒトラーの言葉に留まらず、しばしばスパルタにその模範が仰がれた<sup>43)</sup>。

39) Hitler, A.: Mein Kampf, a.a.O., S.721.

40) こうした人間性の理解は、後にナチスの幹部が自らの蛮行を正当化する際、しばしば依拠したところのものであった。s. Mommsen, Hans: Umvolkungspläne des Nationalsozialismus und der Holocaust, in: Von Weimar nach Auschwitz. Zur Geschichte Deutschlands in der Weltkriegsepoche. Ausgewählte Aufsätze, Stuttgart 1999, S.305.

41) ドイツ語の「寡黙なlakonisch」とは本来「ラコニア（スパルタの古名）的」なという意味である。

42) Hitler, A.: Mein Kampf, a.a.O., Bd. II, S.1059.

43) 「古代のスパルタ人の下で弱い子供の遺棄が普通に行われていたということは、よく知られている。ブルタルコスによれば、立法者リュクルゴスは意識的な嫉という観点に留意していた。しかしその他（スパルタ以外）にも、古典古代において子供の遺棄は多く行われ、それに対する刑罰は全くなかった。こうした人倫は、きわめてインドゲルマン的であったように見える。」(Lenz, Fritz: Menschliche Auslese und Rassenhygiene (Eugenik), Bd. II, München 1932, S.16)。この引用とは異なり、古典古代において子供の遺棄を

スパルタにおいて、教育は家族よりもむしろ国家の事柄であり、スパルタ市民の純血性の維持が国家の大きな関心事であった。このような要請も与りスパルタ市民の数は歴史的に次第に減り続け、それがスパルタ没落の主因の一つとなったことに触れた。翻って第三帝国はこうした人口減少を防ぐため、アーリア人種の子孫の人口増加と純血性の確保を目指し、「生命の泉」という、SS（ヒトラーの親衛隊）を中心とする国営組織を作った。この組織は、本人と相手が共にアーリア人種と認められた未婚の母の中絶を防ぎ、出産を可能にし、子供の養育先を紹介することを目的とした（その子供の父は、ほとんどがSS隊員であった。婚姻によるにせよよらないにせよ、4人以上の子供を儲けたSS隊員は「生命の泉」を財政援助する義務から解かれたためである）<sup>44)</sup>。

## 2. 農業政策

1で触れた人種政策に現れた人種観は、R・ヴァルター・ダレー(R. Walther Darré)において農業政策と結び付くに至った。彼は1933年から1942年にかけて、第三帝国の食糧農業大臣を務めた。ダレーは自らの農業政策の根幹として、1933年「帝国世襲農場法Reichserbhofgesetz」を公布した。この法律は、「およそ7,5ヘクタールから125ヘクタールまでの規模のドイツ人所有の農場を世襲農場と定め、それを一括相続させ、さらにその譲渡・抵当入れ・強制執行を禁じた」<sup>45)</sup>。かかる法律を制定した目的として、「農場を資本主義的市場経済から解放し「民族の血の源泉」たる農民を保護する」<sup>46)</sup>といった点が挙げられている。

ダレーは「帝国世襲農場法」を制定する基となった認識を、『北方人種の生の源泉としての農民のあり方』において述べている<sup>47)</sup>（同書の「第二版への序」には、この法律の抜粋が付されている）。ダレーは同書の中でスパルタを軍事国家よりもむしろ農民国家と見なした上で、第三帝国の農業政策の参照項と考えた。以下、彼によるスパルタ観と農業政策との重なりを検討してゆく。

---

法で禁止した都市国家（テーバイ）が存在したことについては、以下を参照。Schmidt, Martin: Hephaistos lebt - Untersuchungen zur Frage der Behandlung behinderter Kinder in der Antike, in: Hephaistos. Kritische Zeitschrift zu Theorie und Praxis der Archäologie, Kunstwissenschaft und angrenzender Gebiete, 5/6 -1983/4, S.140.

44) 「生命の泉」とスパルタとの関連については、以下を参照。Losemann, Volker: Sparta als *Kehrseite* Griechenlands. Aspekte der literarischen Sparta-Rezeption im »Dritten Reich«, in: Kultur(en) - Formen des Alltäglichen in der Antike, hrsg.v.Peter Mauritsch und Christoph Ulf, Teil 2, Graz 2013, S.846.

45) 豊永泰子「ナチス体制と世襲農場制」（『西洋史学』第79号、1968年）p.23. s. [http:// www.verfassungen.de/de/de33-45/reichserbhof33.htm](http://www.verfassungen.de/de/de33-45/reichserbhof33.htm)

46) 豊永、同上、p.23.

47) Darré, Walther R.: Das Bauerntum als Lebensquell der Nordischen Rasse, München <sup>3</sup>1933 München, S.3f. ダレーとスパルタとの関連について、詳しくは以下の論考を参照。Losemann, Volker: "Ein Staatsgedanke aus Blut und Boden" R. W. Darré und die Agrargeschichte Spartas, in: Klio und die Nationalsozialisten, a. a. O., S. 175-212.

ダレーは、スパルタが本来「財産の集積を完全に禁じ」<sup>48)</sup>、「生活の支えあるいは栄養の源泉、家屋敷としての世襲農場のみを認めていた」<sup>49)</sup>ことを特筆する。彼は古代史家ゲオルク・ブーゾルト (Georg Busolt) に倣って、スパルタ市民に分配された「同じ広さの土地」を「世襲農場 *Erbgut*」と見なした<sup>50)</sup>。さらにダレーは、「スパルタにおいては、世襲農場に基づく場合のみ完全に有効な形で結婚できた」<sup>51)</sup>と主張した。こうして「世襲農場の数と結婚の数が一致していた間、スパルタ市民の後継者はある程度、安定していた」<sup>52)</sup>という。

さてダレーは、スパルタが戦争による戦死者の増加によって脱北方化するやち衰退の道を辿ったという説に、異論を唱える<sup>53)</sup>。むしろ彼はスパルタの衰退の経緯や理由を、「土地問題と北方人種の根源的な農民のあり方」<sup>54)</sup>、つまり経済的、生物学的という二つの観点から以下のように分析する。

ダレーが考察の手がかりとするのは、スパルタにおいて政治的・軍事的な営みの拡大と人口の減少がほぼ並行して起きたことである<sup>55)</sup>。ダレーによれば、「スパルタの政治的な射程が農民国家の防衛費を超えなかった間、国家とその市民の内的な状態は健康であった」<sup>56)</sup>。しかし外征が増えると出費が嵩み、子供を減らすことで出費分を補い、その結果、一子相続人の選抜が行われなくなり、スパルタ市民の中から優秀な人材が減っていったという<sup>57)</sup>。スパルタがペロポネソス戦争で勝利を収めギリシアの覇権を握ると、スパルタ市民の間で金銭と黄金の重要性が増した。かかる状態を反映してダレーがスパルタの大きな転機を認めるのは、前4世紀初頭に最高監督官エピタデウスの定めた法である。この法は子供がいない場合の世襲農場の処分権を認めた結果、実際の土地購買を隠す口実となり、購買あるいは現実の贈与によって世襲農場の大部分は少数のスパルタ市民の手に帰し、世襲農場の統合が行われたという<sup>58)</sup>。「この (エピタデウスの) 法律は、スパルタ市民と彼らの土地との間に存した、お互いに強め合う関係を分断した」<sup>59)</sup>。当時、統合された世襲農場のほぼ半数はスパルタ市民の血を引く女性が所有するに至った。豊かになった彼女らの多くは奢侈に耽り、か

48) A.a.O., S.172.

49) A.a.O..

50) A.a.O., S.162.

51) A.a.O., S.175.

52) A.a.O., S.175.

53) A.a.O., S.168.

54) A.a.O..

55) A.a.O., S.173.

56) A.a.O., S.172.

57) A.a.O., S.172f.

58) A.a.O., S.174, 176.

59) A.a.O., S.176.

つてスパルタ市民の義務であった出産を嘲り、中絶や不妊を促したという<sup>60)</sup>。ダレーはスパルタが没落した経緯と原因を、以下のように総括する。

「(スパルタ没落の) 経済的 (な原因) とは、次のような意味においてである。つまり世襲農場と結び付いた結婚という、本来の農民的な思考に由来した古えのスパルタの考えが、経済的な欲求の満足という理由から放棄されてしまい、スパルタ国家はもはや成長する子供の群れの栄養の基礎としての世襲農場を、財産を求める父親の欲求とは無関係に維持することを配慮しなくなった。(スパルタ没落の) 生物学的 (な原因) とは、次のような意味においてである。すなわち子供の数が一人または二人であることが広まり、世襲農場をめぐる(兄弟の間の) 選抜を減らし、さらにはスパルタの外政の成功の下に始まった人倫の崩壊がスパルタ市民の血を引く女性の責任意識を殺し、人倫の崩壊の席卷がスパルタ人女性の不妊を助長した。」<sup>61)</sup>

以上で行った『北方人種の生の源泉としての農民のあり方』におけるスパルタに関する記述のまとめから、以下のことが言えよう。ダレーは、スパルタ市民による「同じ広さの土地」の所有とその一子相続を結婚すなわちスパルタ市民の純血性の確保と不可分のものとして捉え、この両者の結び付きの中に、「農民的な」スパルタの国制が存続する基盤を読み取った。これと類似して「帝国世襲農場法」においては、決まった大きさの土地の相続が認められ<sup>62)</sup>、「ドイツ国籍を持ちドイツあるいはそれと同種の血統を有する人のみが、農民として世襲農場を所有できる」<sup>63)</sup> という人種上の縛りがかけられ、「世襲農場は法に基づいて、分割されないまま一子相続人に受け継がれる」<sup>64)</sup> と定められた。こうしたスパルタ観や「帝国世襲農場法」に現われた考えは、共に「血と大地の解ききたい結合こそ、ある民族の健康な生活にとっての不可欠の前提である」<sup>65)</sup> という、ダレーがその主唱者の一人であった「血と大地」のイデオロギーに基づいた。彼によれば、スパルタの脱北方化すなわち衰退は、世襲農場の(一子以外への) 譲渡を認めた点にその重要な理由が求められ、ここから「帝国世襲農場法」においては世襲農場の「譲渡・抵当入れを原則として禁ずる」<sup>66)</sup> という規定

---

60) A.a.O., S.176-178.

61) A.a.O., S.178f.

62) 相続を認める土地はスパルタでは一定の大きさ、「帝国世襲農場法」においては一定の幅を儲けるという相違があった。

63) 注46のサイト、第2条の第12、第13章を参照。

64) 同上、第3条の第19章を参照。

65) Darré, W. R.: a.a.O., S.4.

66) 注46のサイト、第4条の第37章を参照。

が盛り込まれたのであった。ダレーによれば、「世襲農場法なしにドイツの血の生物学的な存続は保てず」<sup>67)</sup>、「世襲農場はドイツ民族という人種を再生させる出発点になるべき」<sup>68)</sup>なのであった。こうしてダレーにおいて人種政策と農業政策は、スパルタを鏡として結び付いたのである。

スパルタにおける農業の重視の裏の面は、商業・貿易の軽視ないしは蔑視であった<sup>69)</sup>。ダレーは、ペロポネソス戦争後、衰退期のスパルタを「封建的な金権政治」<sup>70)</sup>の名の下に批判している。かかる商業・貿易の軽視ないしは蔑視と関連して第三帝国は（特に1935年から1939年にかけての「第二次四ヵ年計画」において）食糧・工業原料の国内完全自給自足体制の確立を目指した。これは（後述する）独ソ戦の大きな根拠ともなった。その際ヒトラーは農業のみに重きを置いたわけではなく、（軍備のため）重工業の振興も視野に入れていた。そういった相違はあるものの、第三帝国がスパルタに明示的に触れることなく、スパルタと同様の自給自足体制という目的を追求したことは、注目に値する<sup>71)</sup>。「ナチスは世襲農場制によって、体制の社会的基盤のみならず、食糧自給政策の担い手をも同時に確保しようとした」<sup>72)</sup>ことが指摘されている。

ダレーによるスパルタ観は、ヨーロッパの外の国の姿へと投影された。彼は『リュクルゴスと孔子』（1940年）という書物において、スパルタと中国の立法者を比較した。ダレーによれば両国は共に農業に基づきながらも、中国は祖先崇拝を保ったがゆえに（人口という面で）今日に至るまで繁栄し、これに対してスパルタは祖先崇拝を失ってしまったがゆえに没落したという。そして「世界のある場所で、リュクルゴスと孔子はある意味で統一された。それは侍の時代の日本においてで

67) Gustavo Corni/Horst Gies: "Blud und Boden". Rassenideologie und Agrarpolitik im Staat Hitlers, Schulz-Kirchner 1994, S.34

68) A.a.O., S.35.

69) 第三帝国下、広範囲に普及した暫定的な代用教科書であるいわゆる『小ゲール』には、次のような記述がある。「ドーリアのスパルタ人による社会主義的な戦争国家の一特徴：「反資本主義（交易と貨幣経済に対して閉じられていた。外国への旅行や移住は禁止されていた。古い鉄の貨幣が保たれた）。」」（Gehl, Walther: Geschichte der Antike in Stichworten, Breslau 1938, S.7.）

70) Darré, Walther R.: a.a.O.,174.ヨーゼフ・ゲッペルス(Joseph Goebbels)などナチスの他の幹部も、アメリカやイギリスの民主主義を、しばしば「金権主義Plutokratie」という言葉の下に批判した

71) 「自給自足」というテーマは、ナチスの政権獲得以前、すでに一部の人文主義者の関心を惹いていた。後述するベルヴェは1931年から1932年頃にかけてザクセン学術アカデミーで行った講演「ギリシアの自給自足」において「最近「自給自足」という標語によってギリシアの概念のみならず、ギリシアの本質の根本原理が現在の政治的なスローガンへと高められた」（バイエルン州立図書館, Nachlass von Helmut Berve, Ana 468.A.II.1.1[Griechische Autarkie, 1931-1932])S.1)と述べ、スパルタの自給自足体制について詳しく語っている(a.a.O., S.4-7)。

72) 豊永、同上、p.31.

ある」という、興味深い意見を述べている<sup>73)</sup>。

### 3. 教育政策

ベルンハルト・ルスト(Bernhard Rust)は大学で古典文献学を修め、人文主義ギムナジウムで古典語を教えた後、第三帝国下1934年から1945年まで文部科学・成人教育大臣を務めた。彼は、イエズス会の神学院、イギリスのパブリックスクール、プロイセンの将校団と並んで、スパルタの中に「[理念の担い手]」を輩出し、「自らの生の共同体」を伝承した、「共同体を目的とした厳格な教育の類型を形成する」模範を見ていた<sup>74)</sup>。こうした立場からルストは公の場において、スパルタが教育上、重要な意義を持つことを説くに至る。以下、その二つの例を取り上げたい。

1933年6月24日にラウエンベルクで行われた教員養成コースの開会講演において、彼は次のように語っている。「私(ルスト)は、我々(ドイツ人)が一種のスパルタ市民のあり方を育て上げなければならないこと、このスパルタ市民の共同体に加わる用意ができていない人は、将来国家市民となるのを断念せざるを得ないことを、全く疑いません。」<sup>75)</sup> ここでスパルタ市民の属性を備えることは、ドイツ人であることの条件とされている<sup>76)</sup>。また1936年に開学550年を記念してハイデルベルク大学で行われた講演「国家社会主義と学問」においては、次のように述べている。「ドイツの若者は、自らと<sup>ナ</sup>スパルタの英雄的な若者を結び付ける深い絆に開眼します。両者の間に、何千年もの時が経過しているにもかかわらず。それは、ドイツの若者が自らに相応しくない文化の過剰状態から解放されること、共同体を目標とする男らしい驍と犠牲を辞さない生へ個人が回帰することによるのです。」<sup>77)</sup>

---

73) Darré, Walther R.: Vom Lebensgesetz zweier Staatsgedanken (Konfuzius und Lykurgos), Goslar 1940, S.89. 第三帝国下の日本像については、Koltermann, Till Philip: Der Untergang des Dritten Reiches im Spiegel der deutsch-japanischen Kulturbegegnung 1933-1945, Wiesbaden 2009, 特にS.84-128を参照。日本人は死を軽蔑する点、忠誠や「犠牲の死」を重視する点で傑出しているとされた。こうした性格付けがスパルタの性格付けと類似していることの問題については、独立した考察を必要とする(新人文主義における「ドイツとギリシアの親縁性」のテーゼと似て、第三帝国下においては「ドイツと日本の親縁性」のテーゼが立てられた[a.a.O., S.97-107])。

74) Scholtz, Harald: Nationalsozialistische Ausleseschulen. Internatsschulen als Herrschaftsmittel des Führerstaates, Göttingen 1973, S.99.

75) A.a.O..

76) 後述する、かつての民族<sup>ナ</sup>共同体<sup>ポ</sup>教育施設<sup>ウ</sup>の一生徒は、次のように記している。「スパルタは、「民族性」を洗練させ、下から支えるための手段でした。(中略) 実際にこうした「スパルタ教育」はいわゆる「エリート学校」の一部のみならず、全「民族」の最も広い組織を形成しました。」(Roche, H.: op. cit, p.221.)

77) Rust, Bernhard: Nationalsozialismus und Wissenschaft. Rede des Reichsministers Rust beim Festakt in Heidelberg, in: Das nationalsozialistische Deutschland und die Wissenschaft, Hamburg 1936, S.17.



上の二つの引用においては、ドイツ人にとってスパルタが国家市民への教育や共同体への献身などの点で模範となることが述べられている。ではスパルタという模範は、第三帝国の教育において、どのような形で具体化が図られたのだろうか。これについては、学校内外の教育組織という二つの面から考えてみたい。

第一に、第三帝国においては未来の国家エリートを養成すべく、1933年に民族共同体教育施設およびアドルフ・ヒトラー学校（党幹部予備軍養成学校）という中等教育レベルの全寮制学校が新たにドイツ各地に創設された（この二つの学校の違いは、卒業後の職業選択の有無にあった）。このナチ色の濃い二つの学校の教育において、スパルタは以下のように重要な役割を演じた。

前者の民族共同体教育施設での教育について、同校の学生担当教育部署の長官を務めたアウグスト・ハイスマイヤー(August Heißmeyer)は1941年4月22日のラジオ演説において、自らが称賛する「兵士の道徳」の範例として、ローマ、プロイセン・ドイツと並んでスパルタを挙げた<sup>78)</sup>。同校におけるスパルタの取り上げ方については、ヘレン・ロッシュ(Helen Roche)が『スパルタに呪縛されたドイツの子供たち 1818年から1920年にかけてのプロイセン陸軍幼年学校と1933年から1945年にかけての民族共同体教育施設』<sup>79)</sup>において、詳しい探求を行っている。

彼女によれば、かつての民族共同体教育施設の一生徒は、次のように回想している。「私はブットブス（の民族共同体教育施設）における我々の生活を、まさにスパルタ的なものとして経験しました。」<sup>80)</sup>「疑いもなく我々（民族共同体教育施設）の全寮制学校の生活は、全くスパルタ的な衝動によって計画されていました。」<sup>81)</sup>「ギリシア史の授業で、スパルタとスパルタ市民のあり方は特に強調されました。（中略）他方でスパルタ市民のあり方は、健康で強力な民族性の発展の輝かしい例と見なされました。こうして若者に対するスパルタ教育が、指針として掲げられました。（中略）教師はスパルタを常に、範例それ自体として強調しました。」<sup>82)</sup> ロッシューは、かつての民族共同体教育施設の生徒に対する調査の結果、「自らの通った学校でスパルタの影響について何も覚えていないという事実を強調する人、あるいは古代スパルタとの何らかの特別な関係という意味での「スパルタ的な」という形容詞を覚えていないという人は、調査に応じた人の中でごく僅か

78) Heißmeyer, August: 'Erziehung zur soldatischen Moral. Das Ziel der Nationalpolitischen Erziehungsanstalten. Sonderdruck aus "Die innere Front", Pressedienst der NSDAP', *Die Pforte. Neue Folge des "Alten Pfortners"*; *Zeitschrift des Pfortner-Bundes*, Bd.18(2), S.52f..

79) 注29の著作を参照。

80) Roche, H. : op. cit, p.226.

81) Op. cit, p.228.

82) Op. cit, p.215.

しかなかった。このことが銘記されねばならない」<sup>83)</sup>と記している。

後者のアドルフ・ヒトラー学校においても、スパルタは教授の中心対象となった<sup>84)</sup>。これを如実表すのは、同校において、1940年になってからではあるが『スパルタ 北方の支配層による生をめぐる戦い』<sup>85)</sup>と題する、戦争教育を目的とした教科書が配布されたことである。同書は、プルタルコスやクセノポンといった古代の著作家、ミュラーや後述するヘルムート・ベルヴェ(Helmut Berve)といった近現代の人文主義者の筆を通して古代のスパルタの姿を紹介しているだけではない<sup>86)</sup>。同書の目的は、序文に以下のとおり記されている。

（「この本（『スパルタ 北方の支配層による生をめぐる戦い』）を読んで、私に繰り返し意識されたのは、国家社会主義者としての我々の仕事にとってスパルタの歴史から、きわめて多くのことを学べるということである。それに従ってスパルタ市民が自らの国家を構築し、導き、自らの後継ぎとなる指導者を教育した多くの認識や基本事項は、我々にとっても役に立つ。しかし彼らの没落を招き寄せた失敗を、我々が繰り返すことは許されない。」<sup>87)</sup>

この序文を記したのは、クルト・ペッター(Kurt Petter)というアドルフ・ヒトラー学校の監督局長である。スパルタが第三帝国のモデルとなることが、明確に記されている。引用部の最終文にある「彼ら（スパルタ市民）の没落を招き寄せた失敗」とは、先に触れたダレーが考えたように土地の分割相続の解禁のみならず、少子化による人口減少にも求められた<sup>88)</sup>。それゆえ第三帝国においては本章の1で述べたように、スパルタを反面教師としてその失敗を繰り返さないことが目指された。

『スパルタ 北方の支配層による生をめぐる戦い』の上で引いた序文の後には、第一章の4において触れた「テルモピュライの戦死者碑銘」が掲げられている<sup>89)</sup>。さらに注13で引用したテュルタイオスの「エレゲイアー」の全体も、リヒャルト・ハルダー(Richard Harder)によるドイツ語訳によっ

---

83) Op. cit, p.213.

84) 「アドルフ・ヒトラー学校の生徒は、特にスパルタ人に関する古代の言明を研究することによってテーマを我がものとし、自らの時代に適用することを学ばなければならなかった。」(Miller, Martin: Otto Wilhelm von Vacano [1910-1997], in: Lebensbilder. Klassische Archäologen und der Nationalsozialismus, Bd.1, hrsg.v.Gunnar Brands und Martin Maischberger, Leidorf 2012, S.244.)

85) Vacano, Otto Wilhelm von: Sparta. Der Lebenskampf einer nordischen Herrenschicht (1940), Kempten <sup>2</sup>1943.

86) A.a.O., S.53-59.

87) A.a.O., S.5.

88) こうした面に注目した研究としては、以下を参照。Meier, Theodor: Das Wesen der spartanischen Staatsordnung. Nach ihren lebensgesetzlichen und bodenrechtlichen Voraussetzungen (1939), Aalen 1962, S.35-88.

89) Vacano, O.W.v.: a.a.O., S.6.

て、この教科書に収録されている<sup>90)</sup>。シモニデスとテュルタイオスの作品が『スパルタ 北方の支配層による生をめぐる戦い』に収録された意図は、明らかである。すなわちアドルフ・ヒトラー学校はスパルタを模範として仰ぎ、「祖国に殉ずる死」を最高の価値として宣揚した<sup>91)</sup>のである。

民族共同体教育施設とアドルフ・ヒトラー学校においては、かつてのスパルタと同様、格闘技（ボクシング、レスリング）の訓練が重視された<sup>92)</sup>。また両校の生徒は「若者 Jungmann」と呼ばれたが、これはスパルタの若者に対する呼びかけと同じであった<sup>93)</sup>。

スパルタという模範が第三帝国の教育へ学校外で影響を及ぼした例として、「ユングfolk」と「ヒトラーユーゲント」が挙げられる。周知のように後者の組織は、ナチズムがドイツの青年運動を吸収して成立した。第三帝国において青少年は、10歳になると「ユングfolk」に加入し、その後14歳から17歳まで「ヒトラーユーゲント」に所属することが義務付けられた。これらの組織にあってドイツの青少年は、戦前は週に一日、放課後にナチズムの世界観に関する教育を受け、月に一度、スパルタの軍事的教育制度と同様に共同生活（野外キャンプ）を、主に週末を利用して営んだ<sup>94)</sup>。この共同生活においては、将来、有能な兵士となるべく身体的な訓練に重点を置き、民族共同体とヒトラーへの忠誠が鼓吹された。

「ヒトラーユーゲント」の青少年が送った共同生活は、ドイツ語で「ラーガー」という。この言葉は、第一章の2「スパルタ市民の教育」において記した、スパルタの青少年が30歳まで過ごした「兵営

90) A.a.O.: S.47-52.

91) ヴァイマルのアドルフ・ヒトラー学校において用いられた補助教材から、次の文章を参照。「質素な血の黒スープだけからなる昼食の後、彼ら（スパルタの若者）は自らの身体をスポーツの競争で鍛えた。彼らの一人が行方不明になった。彼は先ほど、血塗れになるほど鞭打たれた。なぜなら、彼は盗みを働いている時に捕まったからである。彼らは競技場に着くと、徒競走、レスリング、槍投げ、円盤投げの鍛錬を行った。彼らの若いリーダーであるアレクサンダーは、あらゆることに卓越していた。（古代）オリンピア競技で、彼は強いアテナイ人をレスリングで負かした。彼はゼウスの神殿においても勝者として称えられ、後に戦争の際には王の傍らで戦い、死ぬことが許されるであろう。全ての人は彼のことを讃嘆しつつ眺める。（中略）少年たちは、なぜ自分たちがこうした教育を受けたのか、まだ知らなかったのかもしれない。しかし我々は次のことを知っている。すなわちスパルタは若者がこうした仕方でも教育された間、強かったのである。」（Gebhardt, Wolfgang: Spartanische Pimpfe. Adolf-Hitler-Schule Weimar, Arbeitsbericht und Elternbrief, 1938/39, S.11.）

92) Krüger, Hardy: »Von der Ordensburg nach Babelsberg«, in : »Wir waren Hitlers Elitenschüler«. Ehemalige Zöglinge der NS-Auslaufeschulen brechen ihr Schweigen, hrsg.v. Johannes Leeb, Hamburg 1998, S.69. Ofner, Harald: »Wir hätten jeden Befehl bedingungslos befolgt«, in: a.a.O., S.222. s. Hitler, A.: Mein Kampf, a.a.O., S.1047.

93) Roche, H.: op. cit, p.211.

94) 「ヒトラーユーゲント」の機関誌である『意志と力』においては、ナチズムの本質とスパルタの本質の一致が称えられた(Bürgener, Martin: Spartanische Jugend, in: Wille und Macht, Bd.2, 1934, S.4f.).

生活 στρατοπέδω<sup>95)</sup> のドイツ語への訳語<sup>96)</sup> とほぼ同じである。「<sup>ラーガー</sup>Lager」というドイツ語は、「共同生活、兵営生活」のみならず「合宿、キャンプ、収容所」など様々な日本語へ訳される。第三帝国においてこの<sup>ラーガー</sup>Lagerは、「ヒトラーユーゲント」のような青少年のみならず、様々な年齢や出自の人に対して多種多様な場において組織された<sup>97)</sup>。例えば強制労働のための「労働キャンプ Arbeitslager」、学者に対する「学者の共同生活 Dozentenlager」が、その例である。こういった<sup>ラーガー</sup>Lagerにおいては多くの場合、参加者が共同生活を行い、相互研讃の場と謳いつつも実際にはナチズムへの思想教育を行った<sup>98)</sup>。この<sup>ラーガー</sup>Lagerはスパルタのみならず、第三帝国を特徴付けるライフスタイルとなったのである<sup>99)</sup>。

#### 4. 占領政策

1941年ドイツはソ連に宣戦を布告し、独ソ戦が始まる。この戦争の主たる目的の一つは、ヒトラーがすでに『第二の本』において主張していた<sup>100)</sup> ように、「土地なき民」であるドイツ人が自給自足できる生存圏の確保にあった。独ソ戦緒戦での勝利の結果、ドイツ軍はウクライナ、バルト三国など広大な地域を占領し、ナチスの占領政策の関係者は、人種的なユートピアを実現する格好の機会が到来したと考えた。

それを表すのは、1942年にソ連の占領政策を論じる関係者の間で練られた「東方総合計画 Generalplan-Ost」である。この計画に関する会議録が残っており、その中でブルーノ・クルト・シュルツ (Bruno Kurt Schulz) というプラハ大学の人種衛生学の教授は1942年2月4日に開かれた第二次の同計画に関する会議で、次のような意見を述べている。つまり彼によれば、スパルタにおける身分の三層構造に則り、東方の新たなドイツ占領地域において「ドイツ人はスパルタ市民の地位、ラトヴィ

---

95) Plutarch: Theseus and Romulus; Lycurgus and Numa; Solon and Publicola, with an English translation by Bernadotte Perrin, London 1948, p.217.

96) Feldlager (軍営)。s. Plutarch: Große Griechen und Römer, eingeleitet und übersetzt v. Konrat Ziegler, Bd.1, Zürich/Stuttgart 1954, S.156.

97) その前身は、青年運動のキャンプ (<sup>ラーガー</sup>Lager) に求められるのかもしれない。

98) s. Losemann, Volker: Zur Konzeption der NS-Dozentenlager, in: Klio und die Nationalsozialisten, a.a.O., S.57.

99) Krause-Vilmar, Dietfrid: Das Lager als Lebensform des Nationalsozialismus. Anmerkungen und Fragen, in: Pädagogische Rundschau, Bd.38, 1984, S.29-38. 古典文献学者のハンス・ボークナー(Hans Bogner)はドイツを新しいスパルタに譬え、両者の共通点として「<sup>ラーガー</sup>Lagerでの男性的な教育」(Bogner, Hans: Die Behandlung der Antike im nationalsozialistischen Geschichtsunterricht, in: Vergangenheit und Gegenwart, Bd.13, 1935, S.13)を挙げている。ベルヴェもスパルタが「<sup>ラーガー</sup>Lagerのあり方をライフスタイルへ高めた」(Berve, Helmut: Sparta, in: Historische Vierteljahrsschrift, Bd.25, Heft 1, 1931, S.11)と記している。

100) Hitlers Zweites Buch, a.a.O., S.145-159.

アやエストニアなどに存在する中間層はベリオイコイの地位、これに対してロシア人はヘイロータイの地位を占めなければならないだろう」<sup>101)</sup>。幸いなことにドイツの敗色が濃くなり東方の占領地域を手放さざるを得なくなることによって、「東方総合計画」はごく一部しか実施されなかった。

しかし、かつてヘイロータイがスパルタ市民によって非人間的な処遇を受けたのと同様、ロシア人が独ソ戦の間、ドイツ人によって過酷な処置を受けたことは明らかである。それは、第二次世界大戦における約1520万人というソ連民間人の膨大な死者の数が示すだけではない<sup>102)</sup>。むしろ重要なのは、ドイツ軍に捕らえられたソ連軍捕虜の死亡率である。すなわち第二次世界大戦中のドイツにおいてイギリスとアメリカという西側諸国の捕虜の死亡率は約3,5%であった。これに対して、ソ連軍捕虜の死亡率は約57,5%ときわめて高かった<sup>103)</sup>。

スパルタをモデルとしたドイツの東方への膨張が、独ソ戦が始まる前、ナチスの幹部によって早い段階で構想されていたことを憶測させる証言がある。オイゲン・コーゴン(Eugen Kogon)は『SS 国家 ドイツ強制収容所のシステム』において1937年の晩秋、SSの上級将校から聞いた話として、以下のように記している。

「指導者としての後継者を養成する我々(SS幹部)が望むのは、古代ギリシアの都市国家を模範とした、近代国家のあり方だ。古代の(ギリシア)文化は、ヘイロータイという経済的に広い基礎を伴う、貴族主義に基づいて指導された民主主義に、自らの偉大な成果を負う。100人の住民から選抜された5人から10人、つまり100人の中から最善の仕方を選抜された者が支配し、残りの者は労働し服従しなければならない。このようにしてのみ、我々が自らとドイツ民族に望まなければならない、あの最高の価値が教育できる。」<sup>104)</sup>

この引用においては、スパルタが(ギリシアの)古代文化の代表と見なされている。なぜなら、(スパルタの)ヘイロータイについて言及されているからである。ヒトラーはすでに『我が闘争』において、ドイツが東方へ領土を拡張すべきことを述べていた<sup>105)</sup>。また第三帝国の民族共同体は、ドイツ人の間での平等を標榜した。この二点を考慮すると、上の引用における「残りの者」とはドイツ人ではなく、むしろドイツの(人種的に劣るとされた東方)占領地域の住民を示唆していると考えられるであろう。

101) Heiber, Helmut; Der Generalplan Ost, in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, Jg.6, 1958, S. 296.

102) Christian Hartmann: Unternehmen Barbarossa. Der deutsche Krieg im Osten 1941-1945, München 2011, S.115f.

103) Burleigh, Michael : The Third Reich - a new history, New York 2000, pp.512-513.

104) Kogon, Eugen: Der SS-Staat. Das System der deutschen Konzentrationslager, Frankfurt am Main 1961, S.20.

105) Hitler, A. : Mein Kampf, a.a.O., S.1657.

1941年、独ソ戦の開始に先立って、ドイツ軍はペルシア戦争の時ペルシア軍が通ったのとはほぼ同じ経路を辿って、ギリシアへ侵攻する。テルモピュライの通過路では、ギリシアを守るニュージーランド軍とオーストラリア軍からなる連合軍を撃破した<sup>106)</sup>。その後ドイツは1944年までギリシアを占領下に置くに至るが、この時期スパルタの周辺で考古学者のオットー・ヴィルヘルム・フォン・ヴァカーノ (Otto Wilhelm von Vacano) を中心として発掘が1941年の8月から9月にかけて行われた (彼は注85で触れたスパルタに関する教科書の編者でもあった)。発掘の目的は、先史時代に行われたと仮定された、北方人種たるアーリア人のドーリア地方への移住を、考古学の発掘によって証明する点にあった<sup>107)</sup>。ヴァカーノは『スパルタ 北方の支配層の生をめぐる戦い』において、中世におけるドイツ人の東方植民をスパルタ人によるメッセニアの占領に譬えていた。こうして彼にとってスパルタ周辺での発掘は、(ソ連などへの) 占領政策と間接的に関わるものとなった。発掘の結果について、ヴァカーノは次のように述べている。「発掘によって、この (スパルタ近郊クフォヴノの) 地域において初めて、ギリシア人以前の住民の痕跡を確かめることができた。この住民は非インドゲルマンの種族に属し、その移住は北方のスパルタ人の侵入よりも1000年以上前に起きた」<sup>108)</sup>。ローゼマンはこれについて、「紛れもなくアクチュアルな認識関心が反映していた」<sup>109)</sup> と評している。

以上、1. 人種政策、2. 農業政策、3. 教育政策、4. 占領政策という四つの観点から、ナチズムの世界観・政策においてスパルタがどのように受容されたか、両者の間にどのような重なりがあるか、検討してきた。スパルタはヒトラー、ダレー、ルストといったナチス幹部の関心を、人種主義、農業政策、教育政策といった異なる側面から惹いた。そしてスパルタは第三帝国において多くの場合、模範として受容された (「同じ広さの土地」<sup>ク</sup><sup>ラ</sup><sup>ロ</sup><sup>ス</sup>と結婚の結び付き、民族共同体教育施設とアドルフ・ヒトラー学校における教育や教科書、<sup>ラーガー</sup>Lager というライフスタイル)。かつてのスパルタのあり方は、それを参考ないしは背景として第三帝国において政策として実施されたもの (帝国世襲農場法、ニュルンベルク人種法、T 4 作戦) もあれば、ほぼ実施されなかったもの (東方総合計画) もあった。これに対してスパルタは、反面教師として受容された場合 (「生命の泉」<sup>レーベンスボルン</sup>) もあった。

---

106) Szeimler, George J./Cherf, W.J.; "Nochmals" Thermophylai 480 BC - AD 1941 Parallels: Topographical & Tactical, in: Text and Tradition. Studies in Greek History & Historiography in honor of Mortimer chambers, edit. by Ronald Mellor/Lawrence Tritle, California 1999, pp.345-365.

107) 「それゆえスパルタの周辺地域の研究は、「以前に構想された計画を実現する最初の可能性のみならず、古い望みの成就」だった。クフォヴノの試験的な発掘は、ギリシアに最初、住んでいた住民は誰かという問いと、「ペロポネソスに達した様々な土地占拠運動」をめぐる問いを明らかにすることを目標とした。ヴァカーノの関心を惹いたのは、「ペリオイコイとヘイロータイの人種的な構造と生き方」であった。」(Miller, M.: a.a.O., S.245.)

108) Losemann, V.: Nationalsozialismus und Antike, a.a.O., S.158.

109) A.a.O..

第三帝国におけるスパルタを参照項とした世界観・政策は、1930年代のドイツ社会におけるスパルタに対する関心の高まりを背景として、よりよく理解できるものとなるであろう。したがって次に、第三帝国におけるスパルタに対する関心の高まりを、学者・作家の言説、人口に膾炙したスパルタ像という二つの面から検討してゆく。

1933年にナチ党が政権を掌握した後、ドイツの人文主義者の間では時代の転機を迎えたという意識から、新体制における古典語教育・古典研究のあり方をめぐって、多くの綱領が記された。その際スパルタは模範として注目を浴び、スパルタに触れていない綱領はほとんどなかったことをローゼマンは指摘している<sup>110)</sup>。

教育や学問の世界でスパルタが多く論じられる際に最も重要な役割を演じたのは、ベルヴェである。彼は1927年から1943年にかけてライプツィヒ大学、1943年から1945年にかけてミュンヘン大学で古代史講座の教授を務めた（1940年から43年にかけてはライプツィヒ大学の学長）。ベルヴェはすでに1934年、人文主義の綱領を論じた論文の中で、古典語教育が生み出すべき人物の一例としてレオニダスを挙げており<sup>111)</sup>、1937年には『スパルタ』という著作を上梓した。同書は彼が1931年に刊行した『ギリシア史』<sup>112)</sup>において述べたスパルタ観を敷衍したもので、多くの人に読まれた。『スパルタ』の序文には、次のようにある。

「古代世界の現象の中で、今日スパルタ国家ほど一般的で生きた関心に出会う現象は稀であろう。若者の教育、共同体精神、軍人的なライフスタイル、個々人の（共同体への）組み入れ、英雄としての実証、つまり我々自身に新たに生じた課題と価値が、ここ（スパルタ）では明晰に形成され、妥協の余地なく実現しているように見える。こうした妥協のなさ、まさにかかる無二の創造的な国家に沈潜するよう、（我々読者に）呼びかけるのである。」<sup>113)</sup>

この引用部においては、スパルタの様々なあり方が第三帝国にとってアクチュアルであることが、簡潔に記されている。第二章の3で引いた、『スパルタ 北方の支配層による生をめぐる戦い』への序文との類似が、目を惹く。ベルヴェは『ギリシア史』においてドーリア的なものとイオニア的なものを、前者の優位の下で区別した<sup>114)</sup>。こういった点、あるいはスパルタの特徴として上の引用で述べられた「個々人の（共同体への）組み入れ」といった点がミュラーのスパルタ観と類似し

110) Losemann, V.: *Die Dorier im Deutschland der dreißiger und vierziger Jahre*, a.a.O., S.123.

111) Berve, Helmut: *Antike und nationalsozialistischer Staat*, in: *Vergangenheit und Gegenwart*, Jg.24, 1934, S.270.

112) Berve, Helmut: *Griechische Geschichte*, Freiburg im Breisgau 1933.

113) Berve, Helmut: *Sparta*, Leipzig 1937, S.7.

114) Berve, H.: *Griechische Geschichte*, a.a.O., Bd.1, S.86.

ていることも、注目に値する<sup>115)</sup>。

人文主義者によるスパルタ受容の例として、イエーガーを無視できない。彼は「はじめに」において触れたとおり、「第三の人文主義」という古典復興の精神運動の中心人物となった。イエーガーの主著『パイデア　ギリシアにおける人間形成』（第一分冊は1934年）は古代ギリシアにおける教育の精神史的な展開を描き、主として国民保守的な読者層の間で高い評価を得た。同書には、「スパルタの国家教育」や「テュルタイオスによるアレテーへの呼びかけ」を論じた章がある<sup>116)</sup>。この二つの章でイエーガーはスパルタの教育の中に、古い貴族の教育を都市国家の文化という土台へ置き換える上で、重要な役割を認めている<sup>117)</sup>。彼は自らのスパルタ観の先達として、ミュラーの『ドーリア人』を評価している<sup>118)</sup>。

ドイツの表現主義の作家ゴットフリート・ベン(Gottfried Benn)は、ヒトラーが権力を掌握した直後の1933年、「ドーリア人の世界　権力と芸術の関係をめぐる考察」(以下「ドーリア人の世界」と略)という文章において、スパルタを雄弁に賛美していた。この文章からの一節を以下、引用する。

「しかし最も意義に満ちているのは、彫刻におけるスパルタ的、アポロ的なものであろう。彫刻の芸術は最初は木、それから青銅、象牙、大理石を素材とし、遠くから段階的に、徐々に美しい身体を陶冶してゆく。これこそドーリア的、ギリシア的な世界の展開である。最初は純粹に自然を模倣し、委託と命令から成立する。やがて素材から、永遠の素材である大理石から規範を引き出す。錬成場や競技場において学ばれた裸像の解剖学が、いつしか目が正確に所有するものとなり、今や内面の顔が現実をあらゆる偶然的なものから解放し、勝者と神々の輪郭が自由に現れる。ギリシアのあり方は次第に強力に、英雄的になる。」<sup>119)</sup>

上の引用部ではまずミュラーの影響下、彫刻およびアポロンとスパルタとの関連が述べられている。そしてスパルタの彫刻の生成、その特徴がピンダロスに倣って格調高く語られている。引用部

---

115) Losemann, V.: a.a.O., S.122.

116) Jaeger, Werner: Paideia. Die Formung des griechischen Menschen, Bd.1, Berlin 1934.

117) ただしイエーガーがスパルタの教育を最高のものとして賛美したわけではないことについては、『パイデア』第三分冊および以下を参照。「プラトンは『法律』の中で、次のように要求する。すなわち理想国家にあって、勇敢さを最高のアレテーとして称賛するテュルタイオスの詩は「改作され」、勇敢さの代わりに正義が据えられなければならない。」(a.a.O., S.149.)

118) A.a.O., S.118. s. Losemann, V.: a.a.O., S.124f..

119) Benn, Gottfried: Dorische Welt. Eine Untersuchung über die Beziehung von Kunst und Macht, in: Gesammelte Werke in vier Bänden, hrsg.v.Dieter Wellershoff, Bd.1, Wiesbaden 1965, S.284f..



の最後の「英雄的heroisch」とは、ナチズムにおいて好まれた語彙の一つであった<sup>120)</sup>。レナーテ・シュレジアー(Renate Schlesier)は、「[「ドーリア人の世界」、つまりナチスの「新国家」とその総合的な超越への、<sup>マグナカルタ</sup>ベンによるすぐに消えてしまった熱狂の大憲章において、彼はアポロンからファシズムを先取りする神、スパルタからナチ・ドイツを時代に先駆けて作り出した」<sup>121)</sup>と記している。

第三帝国においてスパルタという名前が肯定的な含蓄を持ち、親しまれた証座として、スパルタが商品の名称としてしばしば使われたことが挙げられる。以下1)、2)において紹介するのは、1937年『ベルリン・イラスト入り新聞』に掲載された、オーデコロン4711の生産者による日焼け止めクリーム<sup>122)</sup>の広告である。

1) Berliner Illustrierte Zeitung, 13.5. 1937, S.685.



120) Klemperer, Victor: LTI. Notizbuch eines Philologen, Stuttgart 1975, S.7-17. Schmitz-Berning, Cornelia: Vokabular des Nationalsozialismus, Berlin 1998, S.308f..

121) Schlesier, Renate: 'Dionysische Kunst'. Gottfried Benn auf Nietzsches Spuren, in: Modern Language Notes, vol.108, 1993, pp.525-526.

122) s. Losemann, Volker: The Spartan tradition in Germany, 1870-1945, in: Sparta in modern Thought: Politics, History and Culture, edit. by Stephen Hodkinson/Ian Macgregor Morris, Swansea 2012, p.279.

2) Berliner Illustrierte Zeitung, August 1937, S.1187.



上で挙げた二つの広告から、第三帝国においてスパルタが健康的なイメージを喚起したことが窺われる。

謝辞：本論文は、平成29年度科学研究費助成金（基盤研究C、課題番号17K02265）による研究成果の一部として公表するものである。